

「研究論文」

カウンセリングに対する抵抗感を規定する要因の検討 (3)

——感情経験に対する態度測定尺度を用いた追試研究——

谷口弘一（教育学部人間発達講座）

Abstract

This study was replication research from Taniguchi's study (2018), and examined predictors of Japanese college students' attitudes toward seeking counseling. Participants were 251 undergraduate and graduate students (87 males and 164 females) with a mean age of 20.76 years. They completed four measures: attitudes toward emotional experiences, perception of stigma associated with seeking counseling, distress, and attitudes toward seeking counseling. Results of simultaneous multiple regression analyses showed that perception of stigma and gender (male) were significant predictors of more reluctance to seek counseling.

Key words: help-seeking, emotional experiences, stigma, distress, Japanese college students.

問題と目的

心理的問題に対して、カウンセラーなど専門家の援助を求めることに関する肯定的・否定的態度のことを専門的心理援助要請態度という (Fischer & Farina, 1995; Fischer & Turner, 1970)。Komiya, Good, & Sherrod (2000) は、アメリカの大学生を対象にして、感情経験の無条件受容、スティグマ、心理的・身体的苦悩、性別の4要因を取り上げ、専門的心理援助要請態度に対する各要因の影響力について検討を行った。主な結果は以下のとおりである。(1) 自分の感情を無条件に受容できない人ほど、カウンセリングを受けることに対して否定的態度を持つ、(2) カウンセリングを受けると周囲の人から悪く思われるのではないかと感じているほど、カウンセリングを受けることに対して否定的である、(3) 心理的・身体的苦痛が少ない人ほど、カウンセリングを受けることに対して否定的態度を持つ、(4) 女性よりも男性の方がカウンセリングを受けることに対して否定的である。同様の結果は、アメリカの大学に通う留学生を対象にした研究 (Komiya & Eells, 2001)

においても確認されている。そこでは、(1) 感情経験を無条件に受容できない人、(2) 男性、(3) 過去にカウンセリングを受けた経験がない人ほど、それぞれ、カウンセリングに対して否定的態度をもつことが明らかとなった。

谷口 (2018) は、Komiya et al. (2000) や Komiya & Eells (2001) の研究結果の一般化可能性を検討するために、日本人大学生を対象にして、先行研究と同様に、感情経験の無条件受容、スティグマ、心理的・身体的苦悩、性別の 4 要因を取り上げ、専門的心理援助要請態度に対する各要因の独自効果について検討を行った。分析の結果、(1) 自分の感情を無条件に受容できない人、(2) カウンセリングを受けると自尊心や自己価値が下がるのではないかと感じている人ほど、それぞれ、カウンセリングを受けることに対して否定的態度を持つことが確認された。さらに、谷口 (2019) は、感情経験の無条件受容を測定する尺度を別の尺度に変更して、再度、感情経験の無条件受容、スティグマ、心理的・身体的苦悩、性別の 4 要因と専門的心理援助要請態度との関連を検討した。その結果、(1) 自分自身の感情経験を無条件に受容できない人、(2) カウンセリングを受けると自尊心や自己価値が下がるのではないかと感じている人、(3) 男性ほど、それぞれ、カウンセリングを受けることに対して否定的であることが示された。上記二つの研究において、感情経験の無条件受容とスティグマについては、一貫して専門的心理援助要請態度の有意な規定要因となっていたが、性別に関しては、両研究で結果が異なっていた。その理由の一つとして、谷口 (2018) では、男性の割合 (28.2%) が少なかったことが挙げられる。そこで、本研究では、谷口 (2018) のデータに、新たなデータを追加して、再分析を行った。

方 法

調査対象者と手続き

大学生ならびに大学院生 268 名が調査に参加した。分析には、欠損値がない 251 名 (男性 87 名、女性 164 名) のデータを用いた。平均年齢は 20.76 歳 ($SD = 1.29$) であった。調査は、スマートフォンや PC を利用して、ウェブ上で実施された。

調査内容

調査には、年齢、性別など人口統計学的変数を質問する項目に加えて、以下の尺度が含まれていた。

感情経験の無条件受容 4 種類の感情経験 (怒り、恐れ、喜び、悲しみ) に対する態度を測定する尺度 (Allen & Haccoun, 1976) のうち Orientation 下位尺度を日本語に翻訳して用いた。この尺度は、自分自身の感情に対する態度 (8 項目) と他者 (同性・異性の友人) が自分に対して示す感情に対する態度 (8 項目) を測定する尺度である。本研究では、自分自身の感情に対する態度のみを測定した。調査参加者は、各項目に示された感情を経験することに関してどのように思うか

について、とても嫌い (1) ～とても好き (7) の 7 件法で回答した。分析には各項目の合計点を用いた。得点が高いほど、感情経験に対して好意的態度を持つことを示す。本尺度の α 係数は.63 であった。

スティグマ 自己スティグマ (自分自身のことを社会から受け入れられない人間と見なすことで自尊心や自己価値が低下すること) を測定するために、Self-Stigma of Seeking Help Scale (Vogel, Wade, & Haake, 2006) の日本語版 9 項目 (宮仕, 2010) を用いた。本研究では、1 項目のみ若干ワーディングを変更して使用した。調査参加者は、専門的心理援助を求めたいと思うような悩みや問題に直面したとき、各項目で示された内容に関してどのように思うかについて、当てはまらない (1) ～当てはまる (5) の 5 件法で回答した。分析には各項目の合計点を用いた。得点が高いほど、自己スティグマの程度が高いことを示す。本尺度の α 係数は.76 であった。

心理的・身体的苦悩 Hopkins Symptom Checklist (HSCL; Derogatis, Lipman, Rickels, Uhlenhuth, & Covi, 1974) の日本語版 54 項目 (中野, 2016; Nakano & Kitamura, 2001) のうち、HSCL 短縮版 (21-item version of the HSCL; Green, Walkey, McCormick, & Taylor, 1988) に含まれる 21 項目を用いた。調査参加者は、最近 1 週間で、各項目に示された精神的・身体的状態をどの程度感じるがあったかについて、全くない (1) ～よくある (4) の 4 件法で回答した。分析には各項目の合計点を用いた。得点が高いほど、心理的・身体的苦悩の程度が高いことを示す。本尺度の α 係数は.91 であった。

専門的心理援助要請態度 Attitudes Toward Seeking Professional Psychological Help: A Shortened Form (ATSPPH-SF; Fischer & Farina, 1995) の日本語版 8 項目 (宮仕, 2010) を用いた。調査参加者は、心理的問題に対処するために、カウンセラーなど専門家から援助を求めることに関してどのように思うかについて、当てはまらない (1) ～当てはまる (4) の 4 件法で回答した。分析には各項目の合計点を用いた。得点が高いほど、カウンセリングを受けることに対して肯定的態度を持つことを示す。本尺度の α 係数は.70 であった。

結 果

測定変数間の関連

測定変数の基本統計量と測定変数間の相関を Table 1 に示す。専門的心理援助要請態度は、スティグマと有意な負の相関があった ($r = -.27, p < .01$)。また、スティグマは、心理的・身体的苦悩ならびに性別とそれぞれ有意な正の相関があった ($r = .33, p < .01; r = .13, p < .05$)。カウンセリングを受けると自尊心や自己価値が下がるのではないかと感じている人ほど、カウンセリングを受けることに対して否定的であった。また、心理的・身体的苦悩が高い人ほど、そして、男性よりも女性の方が、カウンセリングを受けると自尊心や自己価値が下がるのでは

ないかと感じていた。

Table 1 測定変数の基本統計量と測定変数間の相関

	M	(SD)	相関			
			1	2	3	4
1. 援助要請態度	19.52	(3.71)	—			
2. 感情受容	26.45	(4.75)	-.093	—		
3. スティグマ	24.06	(5.84)	-.266**	-.060	—	
4. 心理的・身体的苦悩	39.44	(11.01)	-.120	-.017	.325**	—
5. 性別	—	—	.112	-.100	.134*	.008

Note. $N = 251$. * $p < .05$, ** $p < .01$

専門的心理援助要請態度に対する各規定要因の独自効果

専門的心理援助要請態度に対する感情経験の無条件受容、スティグマ、心理的・身体的苦悩、性別の独自効果を検討するために、重回帰分析を行った (Table 2)。その結果、スティグマならびに性別が、それぞれ専門的心理援助要請態度に対して独自の寄与を示した ($\beta = -.28, p < .01$; $\beta = .14, p < .05$)。カウンセリングを受けると自尊心や自己価値が下がるのではないかと感じている人ほど、そして、女性よりも男性の方が、カウンセリングを受けることに対して否定的態度を持っていた。

Table 2 重回帰分析の結果

	B	SE	β	t	95%CI
感情受容	-.075	.047	-.096	-1.581	[-.168, .018]
スティグマ	-.178	.041	-.280	-4.334**	[-.259, -.097]
心理的・身体的苦悩	-.011	.022	-.032	-.497	[-.053, .032]
性別	1.088	.477	.140	2.283*	[.149, 2.027]
R^2	.103**				

Note. $N = 251$. * $p < .05$, ** $p < .01$

考 察

本研究では、専門的心理援助要請態度を規定する要因として、感情経験の無条件受容、スティグマ、心理的・身体的苦悩、性別の4つを取り上げ、各要因の独自効果について、谷口 (2018) のデータに、新たなデータを追加し、再検討を行った。その結果、Komiya et al. (2000)、宮仕 (2010)、谷口 (2018)、Vogel, Wade, & Hackler (2007) と一致して、スティグマが専門的心理援助要請態度を阻害する要因であることが、あらためて確認された。

性別に関しても、Komiya et al. (2000)、Komiya & Eells (2001)、谷口 (2019) と一致して、専門的心理援助要請態度に対して有意な独自寄与を示した。すなわ

ち、女性よりも男性の方が、カウンセリングを受けることに対して否定的態度を持っていた。これまで、日本人大学生を対象にした先行研究（木村・水野, 2004; 永井, 2010; 谷口, 2018）では、専門的心理援助要請態度において有意な性差が認められていなかった。本研究では、谷口（2018）のデータに新たなデータを追加した結果、男性の割合が 28.2% から 34.7% に増加した。また、この割合は、有意な性差が示された谷口（2019）における男性の割合（36.4%）とほぼ同等であった。このことから、男性の割合が増加したことによって、性別が専門的心理援助要請態度の有意な規定要因となった可能性が考えられる。その一方で、永井（2010）では、男性の割合が、本研究や谷口（2019）と同等（35.9%）でありながら（全体サンプル数は 596 名で本研究の 2.4 倍）、専門家への援助要請意図において有意な性差は認められなかった。また、木村・水野（2004）では、男女比がほぼ半数（男性 44.4%）であったにも関わらず（全体サンプル数は 239 名で本研究と同等）、学生相談への被援助志向性と性別との間には有意な関連が見られなかった。これらのことから、今後の研究では、男女比が半数となる、より大きなサンプルを対象にして、専門的心理援助要請態度における性差について、あらためて詳細な検討を行う必要がある。

感情経験の無条件受容については、Komiya et al. (2000), 谷口 (2018, 2019) と異なり、専門的援助要請態度に対して有意な寄与を示さなかった。本研究では、谷口 (2018) と同様に、感情経験の無条件受容を測定する尺度として、4 種類の感情経験(怒り, 恐れ, 喜び, 悲しみ)に対する態度を測定する尺度(Allen & Haccoun, 1976) を日本語に翻訳して用いた。本尺度は、Komiya et al. (2000) で使用された Test of Emotional Styles (Allen & Hamsher, 1974), 谷口 (2019) で用いられた感情受容度尺度 (Emotional Openness Scale; 古宮, 2000) と比較すると、必ずしも高い信頼性を示していない。とりわけ、本研究では、尺度の信頼性が、谷口 (2018) よりも ($\alpha = .66$), さらに低下していた ($\alpha = .63$)。このことにより、感情経験の無条件受容が専門的心理援助要請態度の有意な規定要因とならなかった可能性がある。

心理的・身体的苦悩については、Komiya & Eells (2001), 前川・金井 (2015), 宮仕 (2010), 谷口 (2018, 2019) と同様に、専門的心理援助要請態度との間に有意な関連が見られなかった。日本人大学生を対象とした永井 (2010) では、心理的・身体的症状である抑うつよりも、悩みや問題の深刻度の方が、専門家への援助要請意図と有意な関連を示していた。同様に、木村・水野 (2004) においても、悩みや問題の深刻度が学生相談への被援助志向性と有意な正の相関を持っていた。これらのことから、今後の研究では、心理的・身体的苦悩に加えて、悩みや問題の深刻度を同時に取り上げ、専門的心理援助要請態度に対する両要因の独自の寄与について、あらためて詳細に検討する必要がある。

引用文献

- Allen, J. G., & Haccoun, D. M. (1976). Sex differences in emotionality: A multidimensional approach. *Human Relations, 29*, 711-722.
- Allen, J. G., & Hamsher, J. H. (1974). The development and validation of a test of emotional styles. *Journal of Consulting and Clinical Psychology, 42*, 663-668.
- Derogatis, L. R., Lipman, R. S., Rickels, K., Uhlenhuth, E. H., & Covi, L. (1974). The Hopkins Symptom Checklist (HSCL): A self-report symptom inventory. *Behavioral Science, 19*, 1-15.
- Fischer, E. H., & Farina, A. (1995). Attitudes toward seeking professional psychological help: A shortened form and considerations for research. *Journal of College Student Development, 36*, 368-373.
- Fischer, E. H., & Turner, J. L. (1970). Orientations to seeking professional help. *Journal of Consulting and Clinical Psychology, 35*, 79-90.
- Green, D. E., Walkey, F. H., McCormick, I. A., & Taylor, A. J. W. (1988). Development and evaluation of a 21-item version of the Hopkins Symptom Checklist with New Zealand and United States respondents. *Australian Journal of Psychology, 40*, 61-70.
- 木村 真人・水野 治久 (2004). 大学生の被援助志向性と心理的変数との関連について——学生相談・友達・家族に焦点をあてて—— カウンセリング研究, *37*, 260-269.
- 古宮 昇 (2000). 日本語版感情受容度尺度作成の可能性 大阪経大論集, *51*, 173-183.
- Komiya, N., & Eells, G. T. (2001). Emotional openness as a predictor of attitudes toward seeking counseling among international students. *Journal of College Counseling, 4*, 153-160.
- Komiya, N., Good, E. G., & Sherrod, N. (2000). Emotional openness as a predictor of college students' attitudes toward seeking professional psychological help. *Journal of Counseling Psychology, 47*, 138-143.
- 前川 由未子・金井 篤子 (2015). 職場におけるメンタルヘルス風土と労働者の援助要請およびメンタルヘルスの実態 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), *62*, 27-37.
- 宮仕 聖子 (2010). 心理的援助要請態度を抑制する要因についての検討——悩みの深刻度, 自己スティグマとの関連から—— 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要, *16*, 153-172.
- 永井 智 (2010). 大学生における援助要請意図——主要な要因間の関連から見た援助要請意図の規定因—— 教育心理学研究, *58*, 46-56.
- 中野 敬子 (2016). ストレス・マネジメント入門——自己診断と対処法を学ぶ——

第2版 金剛出版

- Nakano, K., & Kitamura, T. (2001). The relation of the anger subcomponent of Type A behavior to psychological symptoms in Japanese and foreign students. *Japanese Psychological Research*, *43*, 50-54.
- 谷口 弘一 (2018). カウンセリングに対する抵抗感を規定する要因の検討 長崎大学教育学部紀要, *4*, 103-111.
- 谷口 弘一 (2019). カウンセリングに対する抵抗感を規定する要因の検討 (2) ——感情受容度尺度を用いて—— 長崎大学教育学部紀要, *5*, 167-173.
- Vogel, D. L., Wade, N. G., & Haake, S. (2006). Measuring the self-stigma associated with seeking psychological help. *Journal of Counseling Psychology*, *53*, 325-337.
- Vogel, D. L., Wade, N. G., & Hackler, A. H. (2007). Perceived public stigma and the willingness to seek counseling: The mediating roles of self-stigma and attitudes toward counseling. *Journal of Counseling Psychology*, *54*, 40-50.

